

〔教育実践研究〕

入学早期の段階で実施した学外演習による学生の学び

米 増 直 美¹⁾ 藤 澤 ま こと¹⁾ 三 宅 薫²⁾ 河 村 め ぐ み²⁾

Learning of Freshmen from Clinical Practice and Seminar which Had the First Semester

Naomi Yonemasu¹⁾ Makoto Fujisawa¹⁾ Kaoru Miyake²⁾, and Megumi Kawamura²⁾

I. はじめに

本学の看護学概論学外演習は、各看護学概論の中に位置付け、入学の早期段階において看護職の活動の現状を知り、看護に対する基本的な理解を深めることを目的とした演習である。『地域基礎看護学概論』の中でもこの学外演習体験を元にした授業展開を実施している。

『地域基礎看護学概論』は、『地域基礎看護学概論 A』『地域基礎看護学概論 B』『地域基礎看護学概論 C』（以下概論 A、概論 B、概論 C とする）の3科目で構成されている。平成17年度までの地域基礎看護学概論学外演習は、概論 A、概論 B、概論 C それぞれに目的・目標を設定し、演習を実施してきた。地域基礎看護学講座では、「地域基礎看護学」という新しい概念構築および教育内容・方法を検討する取り組みを実施してきており^{1,2)}、その中で『地域基礎看護学概論』の内容を全体的に見直し、概論 A、概論 B、概論 C を『地域基礎看護学概論』として統合することを目指した検討を進めてきている。その過程で、まずは学外演習の統合化を図り、これまで概論 A、概論 B、概論 C それぞれに目的・目標を掲げていたところを、『地域基礎看護学概論』の学外演習目標として統一した。この目標は、検討途中である「地域基礎看護学とは何か」の基礎にあたる部分と考える。この新しい取り組みの学外演習における学生の学びを確認し、演習の内容・方法を検討していくことにより、「地域基礎看護学」の概念構築の基礎資料を得ることができると考える。

そこで、本研究では、学外演習を通しての学生の学びを分析することにより学外演習の内容や新たに統一され

た地域基礎看護学概論学外演習の目標設定について評価するとともに、地域基礎看護学概論における学外演習および学外演習後に行う学内での演習の方法を検討することを目的とする。

II. 看護学概論学外演習と地域基礎看護学概論学外演習の実施方法

1. 看護学概論と看護学概論学外演習について

本学における看護学概論は、1セメスターに開講されている。科目には『地域基礎看護学概論 A』『地域基礎看護学概論 B』『地域基礎看護学概論 C』『機能看護学概論』『育成期看護学概論』『成熟期看護学概論』の6科目があり、看護とは何か、看護学の特質と看護理論の果たす意味など、学問としての体系化への努力の現状とこれからの方向を示すものである³⁾。具体的に取り上げる内容は、『地域基礎看護学概論 A』においては、看護理論および看護の歴史、『地域基礎看護学概論 B』は保健師活動等地域を基盤とした看護の活動、『地域基礎看護学概論 C』は精神の健康と看護である。また、『機能看護学概論』は看護職としてのセルフマネジメント、『育成期看護学概論』『成熟期看護学概論』はライフサイクル別の看護を取り上げ、看護学の基礎となる内容を教授している。

そのなかで、看護学への入門となる看護実践現場の見学実習を設定している。これが看護学概論学外演習である。図1に示すように、各看護学概論の時間のなかで、実際に看護職が活動している実践現場での見学を主とし

岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

前岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Formerly Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

た演習を2日間ずつ、5月下旬と6月中旬に実施する。以下、5月実施分を前半、6月実施分を後半とする。

演習場所は、看護の対象の医療依存度、年代が多様になるように、市町村保健センター、学校、医療機関、福祉施設等多種類の施設とし、各施設に2～5名の学生を配置する。地域基礎看護学講座、機能看護学講座、成熟期看護学講座、育成期看護学講座の4講座が前半後半各20人ずつの学生を担当し、看護実践現場での演習を行う。そして、これらの体験を生かし、グループワークや体験報告などを取り入れた授業を各看護学概論の中で展開している。なお本学への編入学生は全員が看護実践経験をもつため、現地での演習には参加せず、看護実践経験を生かして、学外演習後の各看護学概論のグループワーク等の授業に参加する。

地域基礎看護学概論A	学外演習 前半 (5月)	学外演習 後半 (6月)	30時間 1単位
地域基礎看護学概論B			30時間 1単位
地域基礎看護学概論C			30時間 1単位
機能看護学概論			30時間 1単位
育成期看護学概論			60時間 2単位
成熟期看護学概論			60時間 2単位

図1 岐阜県立看護大学における看護学概論学外演習の位置づけイメージ

2. 地域基礎看護学概論学外演習の実施方法

地域基礎看護学概論学外演習での目標は表1に示すとおりである。学外演習直後の概論A、概論B、概論Cの授業時間を用いて、学内にて演習を行う。学生5～6名でのグループ討議を1コマ行い、グループ討議の結果報告を1コマ行う。学外演習の前半、後半とも同じ方法で学内にて演習を実施している。

グループ討議では、話し合いのきっかけ作りとして、地域基礎看護学講座の教員が看護実践現場での演習を担当した学生による、施設の概要報告を行う。施設概要報告には、その施設で活動している職種、援助の対象者、看護の内容を含める。そして、表1に示す4つの目標の視点に沿って話し合う。話し合いの過程では、施設概要報告があった施設のことだけにとどまらず、その他の

学生も各自が体験した演習施設のこともし合い、比較しながら話し合うようにすすめる。そして、この話し合いの結果をグループ毎に発表し、さらに全体討議をする。

発表終了後、10～15分の時間をとり、全学生に対し、レポートを記入し、提出してもらう。学外演習体験およびその体験を元にしたグループ討議を経ての学びを確認するためである。レポートの課題は「学外演習およびグループワークを終えて、印象に残ったことや学んだことなど」で、自由に記載してもらう。レポートの分量は、前半、後半それぞれA5版程度である。

表1 地域基礎看護学概論学外演習の目標

1. さまざまな年代や健康レベルの人々を対象に看護活動が行われていることを理解する
2. 看護職が対象とする人々の生活の多様性を理解する
3. 看護職が活動する場と、その機能の多様性を理解する
4. 地域で生活する人々にとっての看護活動の意味や意義を考える

III. 研究方法

1. 分析対象

地域基礎看護学概論履修者のうち研究の同意が得られた者のレポートを分析対象とする。レポートは、学内での演習が終了した時点で、履修者全員が提出するレポートである。

2. 分析方法

前半、後半それぞれに、レポートの文章から読み取った学びを内容に沿って分類・整理した。ひとつの意味・内容を1データとし、文章の内容が類似したものを集め、小分類名を付け、さらに小分類をまとめて中分類に整理し、最終的に大分類に整理した。分類・整理の過程では、表1に示す目標を考慮しながら、学生の学びを忠実に分類するために、研究者間で検討を繰り返し実施した。

3. 倫理的配慮

当該科目である概論A、概論B、概論Cの履修者に対し、成績が確定した後に本研究の主旨・方法を書面と口頭で説明し、承諾を得た。研究へ同意する学生にはレポートを再提出してもらった。この研究は岐阜県立看護大学倫理審査部会の承認を得て行った。

IV. 結果

研究への同意が得られた学生82名のレポートから、

前半 280、後半 275 の学びが抽出され、【看護職の活動】【対象の多様性】【施設の種類と特徴】【今後の学習への意欲・動機付け】の4つの大分類に整理できた。

前半の結果を表2に、後半の結果を表3に示す。以下に前半・後半の学びの内容を比較しながら結果を説明する。表中および本文中の【 】は大分類、《 》は中分類、＜ ＞は小分類、「 」は具体的記述例を表す。

1. 看護職の活動

学びとして抽出した内容の多くは【看護職の活動】であった。内容は表2、表3に示すように11の中分類に示すとおりである。以下に中分類ごとに内容を述べる。

《看護の目的》は、前半では、地域基礎看護学概論で教授している＜自立を支える＞＜生活を支える＞がこの中分類の殆どを占めている。後半では、＜自立・自律を支える＞＜健康段階を上げる＞が加わり、記述数では＜生活を支える＞が増え、対象の生活を支える看護の目的に学生が着目できていることを示している。

《対象の特徴にあわせた援助》は＜対象の違いにあわせた援助＞＜一人一人にあわせた援助＞で構成された。前半は「症状や性格も考えると一人一人違う人間」

等、対象が様々であることに着目した記述が多くあった。後半ではICU、HCUなど具体的な領域の違いに関連する対象の個別性や、介護度の違いに着目している記述があった。また、対象にあった援助が大切であるという記述もあった。

《意思を尊重》および《相手の立場に立つ》はそれぞれ、援助対象者の思いや考えを取り入れながら援助していること、常に相手の立場に立って考えることの記述があった。後半では、援助をする上で意思を尊重すること、相手の立場に立つことの重要性に気づいている記述が加わった。

《健康段階にあわせた援助》には＜予防＞＜様々な段階に関わる＞＜継続した関わり＞で構成され、後半には＜死への援助＞についての記述が加わっていた。どちらも＜予防＞についての記述が多く、予防が看護の重要な役割の一つであると述べられていた。

《対象者・看護者関係》は前半では＜信頼関係が重要＞という記述が多かった。後半では＜信頼関係を築く＞の記述が増え、＜安心の提供＞についての記述や、対象者と看護者の関係性を説明している記述が加わり、

表2 学外演習前半の学びの内容

() 内は記述数

【大分類】	《中分類》	＜小分類＞	「具体的内容例」
看護職の活動 (212)	看護の目的 (15)	自立を支える (10)	自分のできることはやってもらおうといった自立も大事だなんて感じました。
		生活を支える (3)	様々な角度から人々の健康を支え、よりよい生活を送れるように支援している。
		生命を守る (1)	看護師の仕事は、人の命を預かっているのだと改めて感じた。
対象の特徴にあわせた援助 (25)	対象の違いにあわせた援助 (16)	場は違っても目的は共通 (1)	活動場所も会社・学校・地域センター等様々であること、目標や目的の基本的な部分は変わらずに、しかし、その場に必要の援助をしている。
		一人一人に合わせた援助 (9)	“訪問看護が究極の個別ケアが提供できる場”という言葉にすごく印象を持った。症状や性格も考えることも一人一人違う人間だから、看護にマニュアルはない。そういう意味でも、その人らしい生活を援助してあげれる個別ケアなんだと感じた。
意思を尊重 (5)			看護師は患者を一まとめとして扱うのではなく、一人一人にあったケアをしていかなくてはいけない。
相手の立場に立つ (7)			対象者の詳細な状態を見ていたり、家族や対象者の考えを取り入れながら介護をしていた。
健康段階にあわせた援助 (28)	予防 (19)		意識は無いがその患者さんがどう思っているか考えたり、チューブや機械につながれた新生児を見たら親がどう思うか考えたりする。
		様々な段階に関わる (7)	病気でない人の予防ということも大切な看護職の役割なんだ。
		継続した関わり (2)	様々な看護職者のそれぞれの活動により、住民や地域の方々の健康の予防から、治療、回復を援助したり、支えたりできている。
対象者・看護者関係 (43)	信頼関係が重要 (22)	訪問看護は5・6年の付き合いが当たり前ということに驚いた。	
		信頼関係を築く (22)	信頼関係を築くということは、さまざまな面で大切になってくると感じた。
		信頼される存在 (12)	体のことだけでなく、様々な相談などもできるほど信頼関係を築いていき、何かあった時に頼れる存在であるナースになれたらいい。
		信頼関係を築く (5)	精神面もケアすることで、病気や障害だけを見ているのではなく、その人全体を見ているのだと対象者が感じ、信頼関係を築くことが出来るのだと分かりました。
		よき相談相手 (3)	よき相談相手となり、対象者の不安を軽減させたりすることも同じくらい大切な仕事。
		自己洞察 (1)	看護は決して自己満足になってはならないということを学んだ。

表2 学外演習前半の学びの内容(つづき)

() 内は記述数

【大分類】	《中分類》	＜小分類＞	「具体的内容例」
コミュニケーション (36)		コミュニケーションの重要性 (17)	対象者が違っていても共通しているなど思ったのは、対象者や周りの人とコミュニケーションをこまめにとり、大切にしている。
		信頼関係構築という機能 (9)	信頼関係は日々のコミュニケーションの積み重ねによって作られるのだと思いました。
		ノンバーバルコミュニケーション (4)	こちら側が施した処置に対する反応を見ることによって、たとえ言葉が返ってこなくても、いくらでもコミュニケーションをとる方法はある。
		能力が必要 (2)	看護職にとって重要なのは、コミュニケーション能力。
		安心の提供という機能 (1)	病気を持つ人とコミュニケーションをとることや話を聞くこともその人の不安・ストレスを取り除くという意味でも大切である。
		対象・領域による違い (1)	長期入院患者や、訪問看護の対象者の方との信頼関係をつくるコミュニケーションをどう行うかが重要だと感じた。
		その他の機能 (2)	会話には、患者とのコミュニケーションをとること以外の様々な役割があることがわかりました。
家族への援助 (8)		家族も含めた援助 (7)	対象者だけでなく、家族などのその人を取りまく人々とのつながりも、とても大切なものだとことを知った。
		家族への配慮 (1)	家族への配慮が行き届いているなど感じました。
連携・チーム医療 (9)		チームでケアをする (3)	各施設には様々な職種の人達がいた。それぞれが対象者にあった最も良い方法を出し合い、医療チーム全体でケアしていく。
		連携の方法 (2)	スタッフとのコミュニケーションを良くとることによってうまく患者にケアを提供できると分かった。
		連携が大切 (2)	看護師は、他の様々な職業の方々とのネットワーク、連携をもつことが大切だ。
		連携の必要性 (2)	どこにいても他の医療者との協力は不可欠であり、チーム医療の重要性が分かった。
社会への働きかけ (1)		倫理・人権 (1)	精神科は偏見があるということが上がっていて、それに対する取り組みを詳しく知りたいと思った。
多様な看護の方法・手段 (35)		観察・判断 (7)	体をふきながら患者さんの身体に異常がないかなどをチェックしていて、常に患者さんの状況を観察、把握している。
		相談的対応 (6)	病気の相談だけでなく、精神的な相談や老々介護の問題に対処していくことをしている。
		広い視野を持つ (4)	医療のことだけではなく、「人間としてどうあるべきか」などといったこともこれから学んでいくことはとても大切である。看護職者とは、幅広い考えを持てることが必要。
		対象理解 (2)	患者さんとの会話には、その人の家族構成や趣味などがわかり、生活環境や、過去その患者がうけた経験を知ることで、患者さんの全体像を知る手立てになるということ多くの要素が入っていることを知りました。
		サービス・制度利用支援 (2)	病気のことだけでなく、保険制度や社会福祉の制度を紹介し、医療費や生活面で困らないようにしていること知って、患者だけでなく、家族の負担を減らすようなケアをすと思った。
		対象者同士のつながりを支援 (2)	看護職者と対象者と家族のつながりは大事なあと気づけるけれど、対象者どうしのつながりにも目を向けて活動していてもいい。
		傾聴 (2)	話を聞くことで患者さんの病状はもちろん、今の心の状態も判断していた。
		精神的ケア (2)	看護師は患者の精神的支えにもなるのだと分かった。
		医師とのパイプ役 (2)	看護師は患者さんと近い存在であることが多いので、医療にかかわるその他の医療者と患者さんとのパイプ役、正しい医療知識を提供することも役割のひとつである。
		地域の特徴に応じた看護 (1)	同じ保健センターでも地域によって対象者が違うということを初めて知り、その地域の人々に見合った保健活動が展開されているんだと思った。
		環境を整える (1)	患者だけでなく周りの家族に対するケアも行うことによって、環境を整えていくのだということがわかりました。
		援助の意図 (1)	一つの目的ではなく、様々な目的を持って住民の方と接していると感じた。
		記録を取る (1)	看護師の活動である記録をとるという行為について考え直すことができた。
		配慮が大切 (1)	配慮って大切だなと思いました。
		責任を持つ (1)	信頼を裏切らない責任を負うことが大切。
対象の多様性 (32)			看護を必要とする、看護職と関わっている人はすべての年代の人であり、健康である人も病気である人もそれぞれ対象となっていることも分かった。
施設の種類と特徴 (18)			病院だけでなく、保育所や学校、訪問看護ステーション、保健センター、健診機関など、看護活動する場は実に多い。
今後の学習への意欲・動機付け (18)			難しい医療用語なども出てきて、看護の難しさということも知り、もっと学んでいきたいと思った。

表3 学外演習後半の学びの内容

() 内は記述数

【大分類】	《中分類》	＜小分類＞	「具体的内容例」
看護職の活動 (239)	看護の目的 (39)	自立を支える (13)	対象者がどのようなレベルであっても、対象者の自立を目指して援助しなければならないことは共通して言えることである。
		自立・自律を支える (2)	保健センターに行き、検診結果説明を一緒に聞かせてもらった。印象に残ったことは、やはり自立・自律を促すための説明であったことだ。
		生活を支える (23)	治療ということだけではなく、生活を支援していくことも看護の仕事としてとても大切だと思いました。
		健康段階を上げる (1)	保健センターでは与薬などの医療技術は提供しないけれど、「皆が健康になってほしい」という強い気持ちが保健師から伝わった。
	対象の特徴にあわせた援助 (12)	対象の違いにあわせた援助 (3)	ICU、HCU、要介護1～4まで、さまざまな自立度に対応していかなければならない看護職は大変だと感じた。
		一人一人に合わせた援助 (9)	「その人らしさ」という個人個人を見つめて、その人にあったケアをするということを感じました。
	意思を尊重 (8)		対象が今までどのように生活してきたか、どんな考えを持っているかを理解し、その人がその人らしく生きられるようにサポートしていく。
	相手の立場に立つ (9)		看護職というのは、対象者のことをよく知り、良く理解し、その上で、その人の立場にも立って考えていくことが大切だ。
	健康段階にあわせた援助 (26)	予防 (13)	予防、早期発見など、治療よりもまず病気にならないようにすること、そのための活動も大切だ。
		様々な段階に関わる (10)	看護職者は疾病に対しての治療だけでなく、予防や自立していく為へのケア、対象者やその家族の精神的な支えになるなど様々な場で、いろいろな対象に看護を提供している。
		継続した関わり (1)	看護職の仕事はその時だけという一時的なものではなく、何ヶ月後、何年後という将来までわたる継続的なものだと考えました。
		死への援助 (2)	死を受け入れるよう援助するという発表が大変印象に残った。
	対象者・看護者関係 (28)	信頼関係が重要 (4)	保健センターへ行って実際保健師さんの活動を見て、地域の方々と信頼関係ができていたなあと感じた。
		信頼される存在 (1)	お母さん方にとって、看護師さんは頼れる存在なのです。
		信頼関係を築く (10)	すべての場所で共通しているのは、看護職と対象者とその周りにいる人との情報の共有を通して、信頼関係を築いていること。
		安心の提供 (7)	看護師はやはり安心して相談、ケアを受けられる存在でなければならないと思う。
		対象者との距離 (3)	実際にはある部分では少し距離をおいて置いた方が相手のために良いということに気がつきました。
		身近な存在 (2)	医師よりもより身近で接するのは看護師であって、より相手を知ることができるのだと考えます。
		対象者が主体 (1)	こちらから考えを押し付けたり、強制するのではなく、対象を中心(主体)に考えて、いっしょに考えていこうとする姿勢が大切
	コミュニケーション (18)	コミュニケーションの重要性 (3)	看護職は、どんな現場で働いていても、コミュニケーションを大切にしていると感じた。
		信頼関係構築という機能 (4)	対象者と様々なコミュニケーションや接触を通して、信頼関係を築いていくことが何よりも大切だ
		安心の提供という機能 (1)	乳児など言葉がわからない子にも声かけをして安心させることも大切だと思う。
		その他の機能 (3)	何がその人に一番必要かを見極めたり、それに合わせて看護活動を行っていく上には対象者だけでなく周りの人とのコミュニケーションを大切にしていかななくてはいけないことが分かった。
		能力が必要 (1)	コミュニケーション能力が看護職者には求められている
		対象・領域による違い (6)	工夫やコミュニケーションの取り方とか役割が、科や施設によって違っているのがすごいと思ったし、面白いと感じた。
	家族への援助 (20)	家族も含めた援助 (8)	看護の対象となるのは、患者だけではなく、その家族にも及んでいる。家族の協力・理解を促すのも看護活動の一つ
		安心の提供・不安の軽減 (5)	不安な気持ちを抱えている両親には、小さなことでも報告し、不安をとり除くように努力していた。
		家族内のつながりの強化 (4)	病院で働く看護師の役割は、患者さんの情報を家族に伝えたり、家族からも情報をもらい、早い復帰に繋げる
		家族との連携 (1)	家族との連携も大切だと分かった。
		関係形成の方法 (1)	看護職は対象者とその家族を含めたケアをする。ケアをするためには、その人たちの意思を尊重し、ひとりの人間としてその人らしさを大切にすることによって信頼関係を築くことが必要である
		援助の意義 (1)	家族からの相談にものったり、対象者との接し方や介護法を指導したりすることで、対象者の周りの環境がよくなり、みんなもケアに協力的になったり、地域にケアを広げたりできると分かりました。
	連携・チーム医療 (21)	チームでケアする (11)	保健師や看護師、医師、理学療法士など、様々な医療関係者が協力し、情報交換をしあったりすることで成り立っている。

表3 学外演習後半の学びの内容(つづき)

() 内は記述数

【大分類】	《中分類》	＜小分類＞	「具体的内容例」
社会への働きかけ (11)		連携の必要性 (4)	看護職は他の職種とのチームワークが大切であり、そのことによりよりよい看護を対象者に提供できる。
		連携が大切 (3)	医療はやっぱりチームワークで成り立つものなので、他の看護師、医師、保健師、栄養士、歯科衛生士、作業療法士などとコミュニケーションを取って患者の情報を共有することが大切。
		連携の方法 (3)	看護職はチームで動いたりするので、患者さんとその家族だけでなく看護職者同士などにも信頼関係がなければいけない。
	社会への働きかけ (11)	倫理・人権 (9)	人間らしく生きる権利はあるっていうのは当たり前のことだし、守られなきゃならない。
		社会的問題への対応 (1)	看護職は社会・時代のニーズや流れによって対応していく場面もあることを学びました。
		社会への働きかけ (1)	社会に何かを働きかけ、患者もだが社会の人の意識を変えていくことも時には必要なのだ。
	多様な看護の方法・手段 (47)	相談的対応 (7)	対象者やその周りの人たちの相談相手となることも仕事のひとつだ。
		対象者同士のつながりを支援 (6)	対象者のネットワークづくりも看護職の大きな仕事のひとつである。
		援助の必要性の判断 (6)	看護職の役割は施設により様々である。その中で看護職者は患者にとって今すべき事を考え、判断し実行している。
		環境を整える (5)	よりよい生活の環境づくりというのも看護職者が行っていく。
		安心感の提供・不安の軽減 (5)	看護職者は患者や家族の悩みや不安を取り除くことができる。
		精神的ケア (3)	対象者の方の心のケアや家族の方にも含まれる。
		対象理解 (3)	対象の生きてきた時代背景を知り、対象の毎日の表情や動きなどの変化を見て、どういった援助をするかを考えるための対象理解が大切。
		観察 (2)	ちゃんと観察して周りの状況を見ながらやっていかないといけない。
		安全を守る (2)	看護師は、患者さんや付き添っている家族が安全で快適な病院生活を送れるように、起こりうる事故を予想して、常に視野を広く、こまかいところまで気を配って行動し、事前に事故を防ぐ役割がある。
		地域に密着 (2)	これからはより地域に密着した看護をしていくべきなのかなと感じた。
		プライバシー保護 (2)	患者の名札をイニシャルにするなど、個人のプライバシーに関して現在の病院は気をつかっているのだと言うことが分かりました。
		援助の意図を知る (1)	看護する上でなぜそうしなければならないのかという行動の真の意味や意図を学ぶことが必要であることも学んだ。
		行動を制限する (1)	施設によっては、対象者を拘束するところもあるというのを聞いて衝撃的でした。
		健康意識を高める (1)	家族が病気になってしまったらと思うと、すごく心配だし、他の人たちもきっと同じだと思うから、油断しないことを教えて行くのも保健師や看護師の仕事だと思った。
		感染予防 (1)	毎回手を消毒しており、菌が感染しないように細心の注意をはらっていた
対象の多様性 (15)			看護の対象となるのは、患者だけではなく、その家族にも及んでいる。家族の協力・理解を促すのも看護活動の一つだと思います。家族とのかけはしになり、日常生活の不安を解消していくのも看護師の仕事です。
施設の種類と特徴 (9)			看護と言うと病院と言うイメージが強いけど、学校や障害施設や訪問看護でのその人の自宅など、どこに行っても「看護」はあるものだ。
今後の学習への意欲・動機付け (12)			多くの人とふれあうから、色々大変なことがあると思うけれど、そこから学ぶことや感動することなど、より良い経験ができると思います。この演習であらためて看護職の良さを体験し、学ぶことができました。

信頼関係を築く方法や信頼関係の意義について考えを深めていた。

《コミュニケーション》は前半では重要性についての記述が多くあった。全体的な内容の記述は明確ではなく、漠然と看護とコミュニケーション、コミュニケーションと対象との信頼関係について学んだことを示している。後半では＜対象・領域による違い＞が増えており、精神科、救急、高齢者、訪問看護などの対象・領域の違いによって異なるコミュニケーション技術に着目している記述がみられた。

《家族への援助》は＜家族も含めた援助＞＜家族への

配慮＞があり、看護の対象は家族も援助対象者であるという記述があった。後半では＜安心の提供・不安の軽減＞＜家族内のつながりを強化する＞等があり、家族への援助の意義や方法へと学びを深めていた。

《連携・チーム医療》は他職種との連携や他職種とともに援助をすることの記述があり、前半・後半で内容的には大きな違いはないが、後半の方が全体的に記述数が増えていた。

《社会への働きかけ》は、前半では＜倫理・人権＞にかかわる看護の取り組みを知りたいという記述が1件のみであったが、後半では、＜倫理・人権＞に関する記

述数が増え、さらに＜社会的問題への対応＞＜社会への働きかけ＞も加わった。

《看護の多様な手段・方法》は、＜観察・判断＞＜相談的対応＞＜広い視野を持つ＞等看護の技術や方法に関する記述である。内容は前半・後半ともに多様にあり、看護の手段や方法について多面的に学んでいた。記述数は後半の方が多く、＜対象者同士のつながりを支援＞＜援助の必要性の判断＞＜環境を整える＞＜安心の提供・不安の軽減＞等、より具体的な方法に着目された記述が増えていた。

2. 対象の多様性

前半は看護の対象者は、「すべての年代」「健康である人も病気である人も対象」などと述べられており、他にも「地域に住む全ての人々が看護の対象」との記述もあった。加えて後半には、「看護の対象は患者だけでなくその家族にも及んでいる」と家族に注目する記述があった。そして他にも「人は一人一人違う考え方をし、個性があり全く同じ生活をしている人はいない」など個別性に注目した記述もあった。

3. 施設の種類と特徴

前半は「看護活動する場は実に多いことをあらためて考えさせられた」や、他には「施設ごとにより対象とする人が違ってくる」など、様々な施設があり、施設によって対象者が違うという記述が多くあった。後半は「どこに行っても看護はある」と述べられており、看護活動が多様な場で実践されていることの学びを深めていた。さらに、「相手の人権を尊重するところはどんな場所でも共通する」などの共通部分が分かったという記述もみられた。

4. 今後の学習への意欲・動機付け

前半は「看護の難しさということも知り、もっと学んでいきたい」などの記述があり、学外演習での体験が学習への動機付けになったことが表現されていた。また、グループワークの効果についての記述もあった。後半では、「色々大変なことがあると思うけれど、そこから学ぶことや感動することなど、より良い経験ができる」などの記述があり、看護職の困難さとやり甲斐について表現されていた。また、看護を通して看護師自身が成長できることについての記述もあった。

V. 考察

1. 地域基礎概論学外演習の目標に照らした評価

1) 対象の多様性の理解

前半と後半を比較すると、【対象の多様性】は、後半では記述数が半数に減っている。前半では対象者の多様性のみに焦点があたっていたのが、後半では多様な対象者への看護に焦点がおかれ、数が減ってきたのではないかと考える。内容を見ると、前半では、看護の対象が様々な年齢層であり、様々な健康レベルであることに気づいたという表現が多い。また疾病や障害を持った人のみでなく健康な人も対象であることがわかったとの表現も多い。後半では前半での学びをもとに、看護の対象者は様々なことに加えて、対象者のみでなく、家族も含めたその周りの人も含めて援助していく必要があることが考えられている。また人には個別性があり、それに対応した看護活動の必要性も考えられている。

2) 対象とする人々の生活の多様性の理解

目標には、「対象者の生活の多様性を知る」となっているが、個々の生活に目を向けた記述は殆ど見られなかった。これは初めて看護職が働く場に触れた入学早期の学生の関心が、看護職者自体に向けられたからと推測される。しかし、【看護職の活動】の中の《看護の目的》は前半は15、後半は39と記述数が増え、特に後半は＜生活を支える＞が増え、対象者の生活を視野に入れて看護することが不可欠であることが記述されており、地域基礎看護学概論の中で教授している「生活者として対象を捉えることの重要性」に関する気づきを得ている。実際に対象者の生活がどのように多様であるかについては、今後履修する地域基礎看護方法の中での学修が可能である。地域基礎看護方法の中で行われる外来演習において、個々の対象者の生活を学習したとの結果が示されており⁴⁾、概論から継続して方法論の中で学びを深めていくと考える。「対象者の生活の多様性を知る」ということは、学外演習の中では達成しきれない目標ではあるが、対象の生活にも着目して今後の学修を進めていく必要性はあるので、このまま目標においておきたい。

3) 看護職の活動の場と機能の多様性の理解

活動の場の理解は、【施設の種類と特徴】で分類した記述から確認できる。内容を見ると前半では、看護の場が様々なことに気づいている。また、施設によって

対象とする人が違っていることも述べられており、違いがあることが分かった、という表現が多い。後半では、施設により対象者に提供する看護の目的が異なることの理解に加えて、人権の尊重など、どの施設においても共通する看護があることも考えられている。また、機能の多様性の理解については、【看護職の活動】に分類した記述が、最も多くあったことから、学生は豊に学んでいることが確認でき、目標は達成できていると考える。

4) 看護活動の意味や意義の検討

看護活動の意味や意義として学びの記述を分類していないが、【看護職の活動】の中で「人々の健康な生活を支え、よりよい生活を送れるように支援している」という《看護の目的》や、「よき相談相手となり対象者の不安を軽減させたりすることも同じくらい大切な仕事」（《対象者－看護者関係》＜よき相談相手＞）等の記述があった。具体的な看護職の実践は理解できており、これらは今後、看護活動の意味や意義として考えを深めていける基となると考える。したがって、看護活動の意味や意義の検討という目標は、おおむね達成されていると言える。

2. 地域基礎看護学概論としての評価と学内での演習の方法の検討

学びの記述の中には、看護職から説明されたことから得た知識をそのまま記述しているものや感想レベルのものもあるが、これらの内容は、地域基礎看護学概論で教授している内容とも関連が深いものであった。さらに今後学修する授業科目において学びを深め、確実な知識や考え方が構築されていくものと思われるので、入学早期の段階での学修状況としては、良いのではないだろうか。

学内での演習であるグループ討議では、同じ方法を繰り返して行っているが、前半・後半の学びを比較すると、内容も広がり、深まっている。後半では、現地での演習体験も増え、その体験を元に、学内演習の討議内容も充実してくる。同じ方法を繰り返すことにより、学びとして確実なものにしていくことができるので、引き続きこの方法で演習を実施していくことにしたい。

VI. まとめ

地域基礎看護学概論の中で実施している学外演習にお

ける学生の学びを分析した。目標についておおむね達成できているが、今後も学修を積み重ねることにより、現段階の学びをさらに深め、確実な知識としていく必要がある。特に、「対象の生活の多様性を知る」ことの理解は、今後の学修で補う必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 岐阜県立看護大学：自己点検評価報告書 平成17～18年度；271-272, 2007.
- 2) 片岡三佳, 普照早苗, 松下光子, 他：地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 8(2)；3-10, 2008.
- 3) 前掲1) 5.
- 4) 松山洋子, 黒江ゆり子, 松下光子, 他：外来利用者への付き添い体験からの学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1)；62-68, 2003.

(受稿日 平成20年 6月 5日)

(採用日 平成20年 9月16日)